

田代正夫教授御退職記念号に寄せる

HIRANO, Hideaki / ヒラノ, ヒデアキ / 平野, 秀秋

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会労働研究 / Society and Labour

(巻 / Volume)

37

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

2

(発行年 / Year)

1991-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00018495>

田代正夫教授御退職記念号に寄せる

社会学部長 平野秀秋

田代正夫先生は東京市牛込に生を享け、東京帝国大学経済学部において修学された。

学究生活の緒は、戦時中最大の調査研究機関ともいうべき南満州鉄道調査部ご入社である。第二次世界大戦終結後、東京大学経済学部助手として復帰され、やがて昭和二十四年、法政大学経済学部社会思想史担当の助教授として就任された。ときあたかも占領体制下の日本において学問思想の自由が重大な試練の前に立たされていた。

法政大学正史に少壮助教田代正夫の名をとどめしめることとなったのは、いわゆる「三教授事件」である。このとき田代先生は、菰淵鎮雄教授らとともに、大学教授会は学術研究にたずさわるものの思想信条に関する自由を率先して守べきものであるという旗幟を明らかにし、職を賭して本学の歴史に重き一石を投じられた。この事件がやがて全国に知られるにおよび、ひとり法政大学のみならずわが国全体の学生・研究者が、教授会自治と思想信条の自由との不可分の関係について深く啓発されることとなった。これこそ後人が田代先生に負う学恩の最大なるものとすべきであろう。

法政大学に社会学部が正式に設置されたのは昭和二十七年である。これにともない、その二年後に田代先生は経済

学部から社会学部へ移籍され、爾来こんにちまで三十有余年にわたり経済学史、経済原論などを講じて多数の学生を教育薫陶されるとともに、『経済原論』などの研究業績を世におくられた。ポリテイカル・エコノミーの学徒としての田代先生の学究的情熱の熾んなること、最終講義『マルクスの将来社会観について』のなかにも窺い知ることができる。

社会学部が設置されて以来最初の教学上の問題は、一般教育に関わるものおよび学科制の採用に関わるものであった。さらに大学紛争直後からは、大学全体の教学改革の絶えざる必要性をふまえた、学部教育の改善充実であった。本学部は、学部創立二十周年を契機にこの問題を真摯に取り上げ、以後移転をはさんでなおこの営為を中断せしめぬよう教授会運営において力点を置いている。田代正夫教授は、昭和四十六年社会学部長に選出された。その在任期間は、学部がまさにこの記念すべき創立二十周年を迎えた年と重なっており、先生は自らこの行事を盛大に挙行されるとともに、教学改革討議の促進に尽力された。かくして、田代先生が大学紛争後の学部教学改革の発足を象徴する人物であることもまた不自然ではないのである。

田代先生は天衣無縫、直情径行、正を愛し義を尊び、学問領域をこえて多くの人士と交遊しひろく敬愛を集めつつ齢を重ねて今回ご退職されることとなった。その学殖と人格とにたいし尊敬と愛惜の心をこめて本記念号を捧げるしだいである。